The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウェブスケール・ディスカバリー（WSD）利用者の利用状況と認識 ： インタビュー調査による探索的研究
Author(s)	久保山, 健
Citation	
Version Type	AM
URL	https://hdl.handle.net/11094/84802
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウェブスケール・ディスカバリー（WSD）利用者の利用状況と認識

ーインタビュー調査による探索的研究

大学図書館研究会第52回全国大会（オンライン）
研究発表（2021.9.18）

久保山 健　大阪大学附属図書館

※本発表は、同志社大学・総合政策科学研究科に提出した修士論文（2021年3月修了）の内容を元にしたものです。

目次

1. WSDの背景と現状
2. 先行研究と検討課題
3. 研究目的
4. 調査手法
5. インタビューの結果
6. 考察と課題
7. 本研究の意義

1. WSDの背景と現状

- WSD：自館蔵書に限らず、雑誌論文を含めた多様な学術情報を一括して検索できるツール。
- 国内では、2008年頃から「次世代OPAC」の機能紹介や課題が議論。　＊片岡真（2010）など
- 国内大学のWSD導入率

  - 15%（2016）→19%（2019）→21%（2020）

  - 設置主体別で最多の国立大学

  27大学（2018）→ 25大学（2019）

  →26大学（2020・30%）　＊大学数は86のまま　＊総務省統計局（2021）

1. WSDの背景と現状

- 世界トップ50大学ではWSDが主たるツール

  - WSD導入：47大学（94%）
  - 「WSD」が最初の検索オプション：
    40大学（80%）

＊2017年9月

* THE (2017)

1. WSDの背景と現状

- 国内で見られる「OPAC主義」

(1) 「主要20大学」

（国立七大・早慶MARCH・関関同立・東京工大・豊田工大）

- WSD導入：13大学

＊2017年9月。2021年7-8月も同数（名大はWSD中止、法政が導入）。

- 全てのWSD導入大学（独立したOPACを持つ大学）で、OPACが最初の検索オプション。

＊2017年9月（慶応以外の全て）。2021年7-8月も同じ（早慶以外の全て）。

- 独立したOPACに電子ブックを含む：

10大学 (2017.9) → 15大学 (2021.7-8 ＊8月に変更の東大を含む)

＊東京工大・豊田工大：Times Higher Education2017（ASIA）でトップ50に入った2大学

1. WSDの背景と現状

➡国内で見られる「OPAC主義」

(2) 国内早期導入41大学

- 「OPAC」が最初の検索オプション： 73%（30大学）

＊2017年7月。
2021年7-8月は65%（26/40大学）。1大学はWSD中止の模様。

＊「国内早期導入41大学」は、kitone（2014）から。

2. 先行研究と検討課題

- 先行研究

(1) 北米でのOPAC調査　Yang and Hofmann（2011）など

(2) 国内での機能紹介、製品の紹介

工藤・片岡（2008）、久保山（2008）など

(3) 想定される利用者層・利用シーン

「学部生向け・初学者向け」との声。

大学院生や教員にも適しているとの報告。

眞喜志（2014）、飯野 (2016）、北山（2017）、林ほか（2015）、林ほか（2016）など

(4) 既存OPACとの関係　林ほか（2015）など

(5) 利用形態の検証　Foster et al.（2011）など、国外では多数。

検索結果が多すぎる、関連度の不足などの不満

Scott and Reese（2012）、飯野（2017）など

2. 先行研究と検討課題

- 国内ではWSDを導入していても、OPACが最初の検索オプションである傾向。「OPAC主義」。
- 国内では研究自体がごく限定的。
- 想定する利用者層や利用シーンについて、コンセンサスがない。
  - 「学部生向け・初学者向け」との声の一方で、大学院生や教員に適しているとの報告も。
  - 大学図書館側から「検索結果が多すぎて使いにくい」と否定的な声も。
- 学術情報提供がOPACだけでは不十分という指摘の一方で、WSDのメリット・デメリットや改善すべき点について、一般的認識がない。

3. 研究目的

- WSD利用者をインタビュー調査し、WSDの利用要因や利用状況、WSDに対する認識はどのようなものかを明らかにする。

4. 調査手法

- 対象：大阪大学・同志社大学、WSD利用者・利用経験者。15名。

  （両大学ともOPACが最初の検索オプション）
- 半構造化インタビュー。
- 対象者の募集：メール・対面・SNSなどで、紹介や拡散依頼、直接の打診などにて。「関心相関的サンプリング」。
- 場所：学内共有スペースなど。Skype希望者はSkypeにて。
- 期間：2020年2月17日～4月21日　＊謝礼：図書カード2千円分

5. インタビューの結果

- 対象者（15名）の概要

【所属】大阪大学： 9名、同志社大学：6名

【身分】学部1-2年： 2名

学部3-6年： 4名（6年制学部卒業者1名含む）

大学院生　： 7名（修士修了1名含む）

教員　　： 2名（退職者1名含む）

＊身分は2020年3月時点。

【分野】総合：1名、人文社会：9名、理工：3名、生物：2名。〔文系： 9名、理系：6名〕

＊1名はWSDを「（現在は）ほぼ使っていない」。結果から一部除外。

5. インタビューの結果

- 対象者（15名）の概要

【対象者の傾向】

WSDを比較的長期間、サブツールとして使用。WSDをある程度理解し、他のツールと意識して使い分けをしている。

5. インタビューの結果

- 分析方法
  - 文字起こしのテキストから、インタビューシートの項目に沿って行う。
  - 発話からキーワード等を分析シートに抜き出し。
  - 概念ごとに類型化。
  - インタビューシートの想定を超えた発話は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）に基づき、分析ワークシートを作成。
  - 概念名・定義・ヴァリエーション（具体例）・理論的メモを記載。

5. インタビューの結果

- 利用目的：「補完的に」「幅広く」の発話が多い（メインツールというよりサブツール）。
- 好きな点：「幅広さ」の発話が多い。
- 「図書」よりも「雑誌論文」を探す際にWSDを使用する傾向（学部2年生以上の全員は、雑誌論文を探す際にWSDを利用）。
- 知ったきっかけ、使い始めたきっかけ：「自ら発見」の発話が多い。

5. インタビューの結果

- 「雑誌記事、多様な媒体なども含めて、検索対象が広い」という機能について

  →「肯定」の発話が多い。

- 「検索結果が多すぎて使いにくい」という声について

  →「不満なし、気にしない」の発話が多い。

5. インタビューの結果

- 「学部生向け・初学者向け」という考えについて

  →「肯定」「否定」の発話ともにあり。

  →「否定」＝学部生・初学者に不適　の発話が、6年制学部卒業者・大学院生以上から。

- 「学部生はWSDではなくOPACを優先する」という考えについて

  →「肯定」「否定」の発話ともにあり。

  →「肯定」＝OPACを優先する　の発話が、学部4年生および大学院生以上から。

5. インタビューの結果

- インタビュー項目に含めていない「WSD自体の名称、イメージ」についての発話。

「名前でこれ（まとめて検索）だったら多分その全部のデータベースでやってくれるんだろうな」（大阪大学の対象者）

「ブランド名が足りないですね」（同志社大学の対象者）

6. 考察と課題

- (1) WSDはサブツールとして「補完的に」「幅広く」利用される傾向

  （OPACが最初の検索オプションである大学では）

  ●要因　- 自然に認知される機会が少ない。

  - 周囲から教えられる機会が少ない。

  - 図書館からの案内が少ない。

- (2) WSD利用者のデメリット認識の低さ

  ●提供側の大学図書館が否定的な印象をWSDに対して持つべきではない。

6. 考察と課題

- (3) WSDは大学院生・教員にも有用
  - 「学部生・初学者」がWSDを利用するのに一定のハードルがあることを示唆。
  - これまでの「学部生・初学者向け」は定義が曖昧。

    ⇨「学部低年次生」

    ＝主に学部低年次生。雑誌論文をあまり使用しない人。学術情報の種類の理解が不十分で、データベースの使い分けに習熟していない人。主に日本語文献を使用する人。
  - 「学部低年次生向け」という考え方には疑問。

6. 考察と課題

- (3) WSDは大学院生・教員にも有用
  - 利用者への案内の改善。

    学部低年次生には、状況に応じた使い方（使い分け）のサジェスチョン。学部高年次生・院生には、WSDでこれまで探せなかった資料を見つけられる可能性がある説明。

- (4) 利用者向け名称は分かりやすく

6. 考察と課題

- (5) 本研究の限界と課題

1) WSDが最初の検索オプションの大学では、状況が異なる可能性。

2) 非利用者のWSDに対する印象、WSDを利用しない理由などは対象外。また、WSDをメインツールとする利用者の認識は不明。

7. 本研究の意義

- 学術的意義

  WSD利用者の利用要因や利用状況、認識についての研究が非常に不十分な中、探索的な調査を実施し、その一部を提示した。

- 社会的意義

  実践の場面、利用状況の理解や、サービス改善にあたって、参考になることを提示できた。

参考文献（一部）

・片岡真（2010）「ディスカバリ・インターフェース(次世代OPAC)の実装と今後の展望」『カレントアウェアネス』305、11-5。

・総務省統計局（2021）「学術情報基盤実態調査」e-stat 政府統計の総合窓口（2021年7月17日取得、https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400601&tstat=000001015878 ）。

・THE (2017) World University Rankings 2016-2017 (Retrieved on September 15, 2017, https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/1/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/stats).

・kitone（2014）「国内大学図書館におけるディスカバリーサービス導入事例のリスト」ささくれ　2014年4月13日（2017年7月20日閲覧、http://cheb.hatenablog.com/entry/2013/03/19/122041 ）。

・Yang, S. Q., and Hofmann, M. A. (2011) Next Generation or Current Generation?: A Study of the OPACs of 260 Academic Libraries in the USA and Canada. Library Hi Tech, 29 (2), 266-300, (Retrieved on January 31, 2018, https://doi.org/10.1108/07378831111138170).

参考文献（一部）

・工藤絵理子・片岡真（2008）「次世代OPACの可能性—その特徴と導入への課題」『情報管理』51（７）、480-98。

・久保山健（2008）「次世代OPACを巡る動向—その機能と日本での展開」『情報の科学と技術』58（１２）、602-9。

・眞喜志まり（2014）「東邦大学メディアセンターにおけるSummon(TOHO Search)の導入事例」『薬学図書館』59（３）、182-9。

・飯野勝則（2016）『図書館を変える!—ウェブスケールディスカバリー入門』ネットアドバンス。

・北山信一（2017）「鹿児島大学Summon運用事例報告—まなぶたSearchの4年—導入から運用まで」『[サンメディア学術情報ソリューションセミナー]』

・林豊・大田海・堀優子・星子奈美（2015）「九州大学附属図書館のWebサイトに関するアンケート実施報告」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2014/2015、46-54。

・林豊・大田海・堀優子・兵藤健志・星子奈美（2016）「九州大学附属図書館の2015年度Webサービス改修プロジェクト」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2015/2016、21-4。

参考文献（一部）

・Foster, N. F., Clark, K., Tancheva, K., and Kilzer, R. (eds.) (2011) Scholarly Practice, Participatory Design and the eXtensible Catalog, (2011, Association of College and Research Libraries), UR Research, (Retrieved on January 9, 2020, http://hdl.handle.net/1802/12375).

・Scott, B. T., and Reese, P. E. (2012) Academic Libraries and Discovery Tools: A Survey of the Literature. College & Undergraduate Libraries, 19 (2-4), 123-43, (Retrieved on January 13, 2018, http://dx.doi.org/10.1080/10691316.2012.697009).

・飯野勝則（2017）「ウェブスケールディスカバリーの運用とその展開可能性」『日本図書館研究会　第326回研究例会』2017年1月。

＊全ての参考文献は、修士論文に掲載。

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/83311/